

与謝野寛・晶子『満蒙遊記』をめぐって

田口道昭

一

一九二八（昭和三年）年五月から六月にかけて、与謝野寛と晶子は、満鉄（南満洲鉄道株式会社）の招待で、現在の中国東北部にあたる満洲と内蒙古を旅している。

周知の通り、満鉄は、日露戦争でロシアから獲得した南満洲の鉄道とその付屬事業を經營する半官半民の国策会社で、一九〇六年（明治三九年）年に設立された。一九三一年に満洲事変が起き、翌年、日本の傀儡国家である満洲国が創立されると、満鉄は、満洲国の国有となった鉄道すべてを經營し、他の産業部門にも進出した。夫妻の旅は、満洲事變の三年前のことである。

この旅行に関する夫妻の紀行文や短歌などの作品の一部は、旅行中から発表されていたが、その中心となるものは、帰国後、晶子によって、「満蒙の旅」と題して『横浜貿易新報』に連載されている。単行本としてまとめられたのは一九三〇年五月のこと

で、「満蒙遊記」と題され、寛の紀行文と短歌と漢詩、晶子の紀行文と短歌が収められた。¹⁾

『満蒙遊記』の「出発と船中」（与謝野寛執筆）の章に「我我は先づ何よりも公務や商用で旅行する境遇でないことの気安さを喜んだ。満鉄本社は我我を招いて、満蒙の晩春初夏を觀て歩かせ、氣に入つた所で歌を詠めと云ふのである。こんなに愉快な旅行は生涯に幾回もあらうとは思はれない。我我は本社の諸友の厚意を満喫しよう」とあるが、満鉄の招待によるこの紀行は、本人たちが意識する以上に大きな（政治的）意味を持っていたと考えられる。旅行中に、奉天派軍閥総帥の張作霖の盟友で、黒竜江省督軍兼省長であった呉俊陞の第二夫人の呉夫人と逢つたこと、張作霖爆殺事件の現場近くに居合わせたことの意味も大きい。

本稿は、この旅行で寛と晶子が出会つた人々や見聞した事柄の意味、その後の晶子の文学や思想の展開における『満蒙遊記』の位置について考察したい。²⁾

夫妻が満蒙旅行に出発したのは、一九二八年五月五日夜である。東京駅には、前年に満洲を訪れ、今回の旅行のきっかけともなった正宗得三郎をはじめ、友人や学生たちが見送りに来ていた。翌日、神戸港を大阪商船の亜米利加丸で出帆、大連には九日の朝に着いている。

大連の埠頭には、満鉄の鉄道部長だった宇佐美完爾夫妻、満鉄社員で画家の眞山孝治のほか、やはり満鉄社員で大連鉄道事務所経理長だった西田猪之輔、京清日日新聞編集局長だった渡辺三洲（巖）が出迎えた。西田、渡辺はかつて新詩社の同人だった。

眞山に案内されて、二人は、まず満鉄本社へ挨拶に赴いている。満鉄の招待である、この旅行中、寛と晶子は満鉄の社員によつて案内され、また、訪問先のいたるところで満鉄関係者に会うことになる。

この旅行のきっかけとなったのは、当時満鉄哈爾濱事務所所長であった古澤幸吉の招待だった。古澤の娘松江は晶子が主幹を務めていた文化学院の卒業生で、古澤が文化学院にグラントピエノを寄贈するなどの交流があった。当時、満鉄は、日本から多くの文化人を招待していたが、以上のような関係もあり、古澤から与謝野夫妻へ誘いがあったものと思われる。

当初、一ヶ月に及ぶ旅行に二の足を踏み、一度は断念した晶子

たちであったが、改めて、旅行に赴くことを決意し、古澤と連絡をとり、古澤の仲介で満鉄の鉄道部長であると同時にジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部の支部長だった宇佐美完爾とも連絡をとった。大連では、宇佐美に招かれて食事もしている。

実際に現地での案内役を務めたのは、画家の眞山孝治であり、詩人の加藤郁哉だった。眞山孝治（一八八四～一九八二）は、画家で、『講壇倶楽部』や『文章世界』、『雄弁』等に表紙や口絵を描いた人物として知られる。一九二一年に満鉄運輸部営業課（二三年四月から鉄道部旅客課）付の嘱託画家として入社し、満蒙の觀光宣伝に努めた。高媛は、プロの画家である眞山の「採用は満鉄が觀光宣伝に本腰を入れる象徴的な出来事」と指摘している。彼は、満洲を訪れた文人や画家たちの案内役を務めており、与謝野夫妻の案内も、その仕事の一環であった。寛の書いた次の記述からも眞山らの手厚いもてなしの様子がうかがえる。

十四日、朝より眞山君の社宅に招かれて行き、初めて眞山夫人と令嬢達に逢ひ、階上に於て大連の諸君に分つべき諸種の揮毫をした。宇佐美夫人も特に来て、眞山君と共に予等の揮毫のために座上の斡旋をして下さるのであった。午餐には眞山夫人の心尽しに成る食卓に就き、宇佐美夫人、眞山君一家と共に、家族的に打解けた一時間を過ぐした。

（『満蒙遊記』大連雜記、以下同書からの引用は章題のみを記す）

眞山の案内は、寛・晶子の旅行の出発が当初の予定より遅れたため、大連・旅順のみとなり、以降の案内は、満鉄本社の営業課所属で詩人でもあった加藤郁哉に託されることになった。

加藤は、一八九九（明治三二）年生まれ、東京外国語学校露語科を卒業、一九二〇年に満鉄に入社し、一九二七年より満鉄本社営業課旅客係に勤務していた。学生時代から『文章世界』に投稿し、原石鼎と交流を持って俳句を作ったり、西村陽吉、高群逸枝らと短詩による新詩形運動を興したりしていた。満洲に渡って以後も詩作を続け、一九二七年に満鉄社員会雑誌『協和』に詩壇が設けられると、その事務を担当していたという。寛は、「満鉄本社の宇佐美君が特に予等の満蒙旅行のために、君を煩はして東道の主人たらしめられたのは、その用意の深いのに感謝される」（大連雑記）と書きとめている。

また、大連では、当時満鉄理事だった小日山直登（一八八六～一九四九）が夫妻を訪ねている。昭和製鉄所理事長、製鋼統制会理事長を経て、満鉄理事（一九二七年九月～一九三〇年五月）になった人物で、この旅行の数カ月後に結成された満鉄青年連盟（一九二八～一九三二）の理事長となり、のちに満鉄総裁（一九四三年七月～一九四五年四月）、鈴木貫太郎内閣の運輸通信大臣、東久邇内閣で運輸大臣を務めた人物である。

小日山からは歌集『獄に行く』（一九二四・四）を献呈されている。寛は、「予等は君の歌に現れた誠実と雅懐とを尊敬し、併せて其の専門歌人臭の無いのを喜んだ。真の歌には師を要しな

い。ますます君が独自の創作態度を徹底されたいと望むのであった」（大連雑記）と書いているが、この出会いをきっかけとして、小日山との交流は、生涯続いた¹³。

与謝野夫妻が小日山に初めて会ったのが五月二日、一日には小日山主催の短歌会に赴いている。そのほんの数日前の四日から六日にかけて満洲青年連盟の母体となった大連新聞主催の「満洲青年議会」が開かれ、小日山はそこで「模擬内閣」の「総理大臣兼外務大臣」に選ばれている。こうした動きの背景には、前年五月の済南事件以降拡大した排日運動や、張作霖の動きに対する在満邦人の危機感があり、一月の満洲青年連盟の結成につながっていた¹⁴。「満洲青年聯盟宣言」は、「日華共存」と「繁栄」、「東洋永遠ノ平和」を訴えるが、「我等ノ先輩ガ薨天ノ犠牲ヲ扨ヒ永年ノ努力ヲ傾倒シ」「開発ニ努メ」てきた満蒙の權益を守ることに、「産業ノ振興ニ、人口食糧問題ノ解決ニ、其ノ資源ヲ満蒙ニ俟ツヤ急ナリ」といった「母国ノ情勢」に対応する訴えのほうが重要とされていたと思われる¹⁵。大連での出会いで、どのような話がなされたかはわからないが、小日山との出会いとその後の交流が、寛や晶子の満洲観、中国観にある程度影響を与えたであろうことは推測される¹⁶。

与謝野寛・晶子の満蒙旅行は、以上のような人的ネットワークに支えられたものだったが、先述の通り、そこには満鉄側の広報戦略も働いていた。この旅行の前年四月に満鉄社長室直属の「情報課」が設置され、一九二三年四月に誕生した宣伝組織「弘報

係」と「企画係」を傘下に置いている。「弘報係」の設立にかかわったのは、一九二三年に田山花袋を満洲の旅行に招待した陸軍中将高柳保太郎であり、彼を理事待遇の高級囑託として迎えたのは、当時満鉄理事だった松岡洋右である。寛・晶子の満洲旅行は、一九二〇年代の満鉄の広報戦略の一環として、「情報課主導のもとで『名士招待』による満洲宣伝の動きが一層活発化して」いく中で行われたものだった。¹⁹⁾

満鉄が発行した旅行案内書『南満洲鉄道旅行案内』は、明治四四年、大正元年、大正六年、大正八年、大正一三年、昭和四年、昭和一〇年と版を重ね、改訂されている。昭和四年版より、満洲を訪れた文人たちの短歌や俳句が掲載され、前年の寛・晶子の短歌が早くも収められている。

千山のいたゞきの空岩々のとがりに触れて紺青に澄む 寛
湯罫子蛙なくなる夕ぐれに柳のわたのしのびくる窓 晶子
落つる日が沙河の柳に残るとも青銅を立つ湯の窓の峰 寛
五龍背青山がちの中にして夕日うつるは赤土の山 晶子

同行した加藤郁哉によって掲載されたと推測されるか²⁰⁾、ガイドブックに「風景を切り取るスナップ写真の如く添えられ」（高媛²¹⁾）ものとして、内地の満洲イメージを形成するうえで果たした役割は小さくなかっただろう。

なお、『満蒙遊記』を刊行した大阪屋号書店は、一九〇四年開

業、一九〇八年に大連に本店を置き、書籍や雑誌の「卸業」を営んでいたが、一九二〇年東京に本店を置き、その頃より出版にも本格的に取り組み、満洲関係の書籍を刊行していた。²²⁾ 田山花袋の『満鮮行楽』（一九二四・一一）や小日山直登の歌集『黄塵』（一九三一・一）、後述する早川正雄『呉俊陞の面影』（一九三〇・二）なども大阪屋号書店から刊行されている。一九二八年九月二十五日付の小林天眠宛の寛の書簡には「妻が『満蒙遊記』と云ふ本を書き候。大阪屋号という書肆より出版致すべく候」とあり、おそらく満鉄関係者を通して旅行中に紀行文を書籍化する話がついていたものと思われる。収録された写真も「満鉄写真班の写真が最も多く、また亜細亜大観社の撮影が二三葉まじつてゐる」（『満蒙遊記の始めに』）。

以上のように、夫妻の旅行は、古澤幸吉の招待にはじまったものだが、高媛の指摘通り、満鉄が「交渉の条件提示の段階から、予備知識の付与や同行案内人の配置に至るまで、かなり用意周到な準備を行っていたことが分かる」。『満蒙遊記』のもととなった『横浜貿易新報』に掲載された晶子の「満蒙の旅」は、帰国後すぐに執筆されているが、満洲の歴史や文化、現状について触れた部分は、資料提供等、満鉄関係者の協力なしには執筆し得なかっただろう。以上の点から、夫妻の旅行が満鉄の広報戦略の一環であったことを改めて確認しておきたい。

ただし、「満洲旅行に招待される文化人は全員、満鉄やJTB大連支部の思い通りの満洲宣伝に寄与したわけではない」（高

媛²³）。そうした中で、晶子と寛の紀行文はどのような特徴をもっていたのか、次に検討したい。

三

夫妻の行程は、大連にはじまり、旅順、南山、金州、熊岳城、營口、湯崗子温泉、千山、遼陽、安東、さらに、内蒙古の齊齊哈爾から、哈爾濱へと至り、長春、吉林、撫順、奉天を訪ね、大連に戻るというものだった。道中、加藤郁哉のほかに、詩人の佐藤惣之助が加わったりした（湯崗子温泉から奉天まで）。行程をもう少し詳細に記すと、次の通りである。

五月九〜一五日　大連（小盗見市場・福昌華工株式会社・碧山荘・貧民窟・大連病院・硝子工場・油房・大連神社・星ヶ浦・満鉄本社で講演）
五月二二日　旅順（戦利記念館・白玉山・爾靈山）
五月二六日　金州・熊岳城（南山・農事試験所・熊岳城市街・熊岳温泉）
五月二七日　營口（遼河）・湯崗子温泉
五月二八〜二九日　千山（香巖寺・大安寺・羅漢洞・中会寺）
五月二九〜三〇日　湯崗子温泉

五月二一日

五月二二〜二三日

五月二四日

五月二五日

五月二六日

五月二七日

五月二八〜三一日

六月一〜三日

六月四日

六月五日〜七日

遼陽（遼陽の白塔・裁判所・監獄・阿片吸引所・城隍廟・満鉄倶楽部で講演）
安東（鴨緑江・満鉄倶楽部で講演）
龍背温泉
奉天・四平街
内蒙古へ（四洮鉄道）・洮南（市街地・田舎芝居）
昂昂溪・齊齊哈爾（嫩江）
昂昂溪から東支（東清）鉄道に乗り哈爾濱へ
哈爾濱（伊藤博文石像・日本の小学校・キタイスカヤ大街・松花江・領事館・博物館・古澤幸吉家・キャパレー・市街見物・シネマ館・珈琲店・露西亞人墓地・極楽寺）
長春・吉林・公主嶺（龍潭・吉林城・寬城市・長春城外・城内・長春高等女学校・大和ホテルで講演会・本城徳太郎宅・運動会・農事試験所）
奉天（大和ホテル）・撫順（撫順炭礦・高等女学校・小学校で講演）
奉天（朝日新聞支局・南満医科大学・奉天城・満鉄公所・四平街・日本領事館・

北陵・満鉄図書館で講演）・八日大連着
旅順

六月九日
六月一〇～一一日 大連（硝子工場・満鉄図書館）
六月二二日 帰途に就く（一七日、東京の自宅に到着）

大連・旅順にはじまり、満洲三大温泉である熊岳城、湯岡子、五龍背温泉を訪れ、遼陽と奉天、哈爾濱、長春、吉林をめぐるのは、満洲旅行のほぼ定番の行程といつていいだろう。⁽²⁵⁾

訪問した先々で講演を行っていることも注目されよう。なお、当初の予定では北京も訪れるはずだったが、国民革命軍の北伐、張作霖爆殺事件などの情勢から断念することになった。

旅順の戦跡は、旅行者が必ず訪れる場所であったが、寛と晶子たちがそこでどのように感じ、表現したか、まず旅順をうたった二人の歌を比較してみたい。

泣かずして旅順の山を行きがたしこぼるる砂も咽ぶ音ぞする

寛

しら玉の名は美しくしき此の塔も見よ踏みたるは万人の骨
旅順より別れんとして惜しきかな後ろに青きアカシヤの列

寛

亡き魂の生きよ旅順の塔の廊踏めば初めに帰るが如く 晶子
円かなる白玉山の塔の廊月の如くに冷たかりけれ 晶子

先に述べたように、満洲を訪れた文人たちの短歌や俳句は、ガイドブックである『南満洲鉄道旅行案内』に掲載された。寛の歌と較べると、たとえば『南満洲鉄道旅行案内』（昭和十年版）に掲載されている大町桂月の「武夫の屍の山となりたりし爾靈の山の前にぬかづく」や島木赤彦の「海の日に入りて明るき山の上ここに戦ひて誰か帰りし」といった歌は、紋切型に感じられる。寛の歌には主情と景を一体化させた抒情性や二首目のような批評性がある。寛は、紀行文においても「塔尖に巨大な砲丸を据えた没情的裝飾だ。死者はすべて君国の愛に殉じたのである。塔の設計者は何故に其の至純至美の愛に副ふべく意を用ひなかつたか。死者の願つた所は永久の「平和」である。砲弾の表示する所は敵意であり、憎悪であり、兵火の残忍な威力である」（大連雜記）と書いている。これに比べると、晶子の一首めの歌は、二句、三句と息継ぎ、下の句が明瞭でない憾みがある。二首目も平凡だ。『滿蒙遊記』には、寛の歌二三九首と晶子の歌二二四首が収められているが、山本藤枝は、「概して晶子の歌には多少上すべりの感があり、寛の作にはしっとりした旅愁がただよっている」と述べている⁽²⁶⁾。いくつかの例外はあるが、右の歌について言えば、やはりそういった傾向があるように思われる。いずれにしろ、右の二人の歌は『南満洲鉄道旅行案内』には採られていない。

さて、旅程で特筆されるのは、千山や内蒙古を訪れていることだが、千山の訪問は、大町桂月や田山花袋も訪れているほか、前年に有島武郎と正宗得三郎も眞山孝治の案内で訪れ、夫妻に勧め

たことから実現に至ったものである。『滿蒙遊記』には晶子らしい美意識で次のように描かれている。

清楚な藍色の服を一樣に著けた道士達が静かに私達を迎へてくれた。皆道釈人物画にあるやうな、品の好い、仙骨を帯びた人柄の道士である。僧と違つて皆薄い顎髯を生やしてゐる。中に一人、清く瘦せて、背のすらりとした三十歳ばかりの、色の白い、明眸の道士が芥川龍之介さんの風^{ふう}を連想させるのであつた。(湯岡子と千山)

しかし何より注目されるのは、この時代に内蒙古を訪れ、斉齊哈爾で、張作霖の盟友であつた呉俊陞の第二夫人であつた呉夫人と逢い、交流をもつたことである。それまで夫妻は、旅行の先々で満鉄関係者をはじめ、多くの在満日本人に歓待されている。一方で実際に現地の中国人と語り合うことはほとんどなく、むしろ、濟南事件後の中国の反日感情に直面しなければならなかつた。

濟南事件は、夫妻が滿蒙旅行に出かけた五月はじめに起きている。国民革命軍が北伐を再開して濟南に入ったのに対し、日本軍が在留邦人保護の名目で出兵し、濟南を占領した事件である。熊岳城での体験を、晶子は次のように伝えている。

城内はキリスト教青年会が排日の宣伝をしてゐるので、私

達は万一の危険を警戒して、東門から北門への大通を鑓形に早足で通過するに止めた。(中略)北門外に待たせて置いた自動車に乗らうとすると、支那人の運転手が何処かへ行つて見えない。待つてゐる間に多勢の人だかりがして、その目が殊に洋装の私に注がれるので、濟南事件以来の排日の噂を連想して、私は一種の不気味を感じるのであつた。(熊岳城)

こうした不安を抱えるなか、夫妻は内蒙古へと向かつたのである。向かう途中の奉天駅の日本兵たちの緊迫した様子を伝えながら、「良人と私とは、今現に奉天の日本軍から支那へ働き掛ける或る重大事のために、一人の日本兵もあない内蒙古へ行つて、第二の濟南事変が私達の上に激発されるのではないかと危ぶまれた」と書いている(奉天駅の印象)。「或る重大事」とは、国民革命軍の北伐が滿洲に波及することをおそれた日本政府が国民革命軍と当時北京にあつた奉天軍(張作霖軍)に対して警告的声明に出したのに対応して、関東軍が奉天軍の武装解除を目標として部隊の錦州派遣の準備にとりかかつていたことを指す。錦州派遣は、守備範囲である満鉄沿線外となり、奉勅命令が必要だったが、結局それは出されなかつた。収まらなかつた関東軍の高級参謀河本大作が、その後、滿洲へ帰還途中の張作霖を謀殺したのである。

このような状況のなか、内蒙古での体験は、寛と晶子に秀歌をもたらしたとに思われる。

遠く行き経は負はねど詩を負へり蒙古の沙よ我を埋むな 寛
 沙立ちて銃声おこる一群の支那兵わしる蒙古狗吠ゆ 寛
 国にゐて獅子の夢をば見る人も蒙古に入れば沙を歎きぬ 寛

一 首目、玄装（三藏法師）をイメージしつつ、詩（文芸）を背負う「我」をうたっている。蒙古の沙（砂ではなく）に埋もれそうな「我」を鼓舞している。二首目は、そんな「我」の前に、走り、吠える支那兵と蒙古狗がイメージ化される。母音のウの音が二・四・結句で繰り返され、緊迫感を伝える。三首目は、日本という国の中では大言壮語を吐いていても、蒙古の大自然の中では、沙に足を取られて自由に動けない、情けない自分を詠んでいる。この歌は、広大な満蒙の地で、なすすべもなく埋もれそうに日本人の姿を象徴的に浮かび上がらせている。

晶子の歌では、「上すべり」（山本藤枝²⁰）でも「風景を切り取るスナップ写真の如く添えられ」（高媛³⁰）たものでもない歌として、以下の歌が挙げられる。

われは今地と云ふものの平らかさ教ふるさまの落日とある

晶子

都とは沙漠の空をゆきかへるめでたき雲を見ざるところぞ

晶子

寛と同じく内モンゴルの体験をうたったものだが、一首目は、地

平線とは文字通り、地が平らかであることを示すものだったことを、地平線に沈む夕陽の大きさによってはじめて教えられた感動を表現している。「われ」と「落日」とが対峙している。二首目は、前歌から一転、都を想う。沙漠という人工物のない場所こそ、みごとに美しさをみせている雲の行き帰りを見る事ができる。それと比べると、都という、人間の営みの場のなんと小さなことか。

さて、齊齊哈爾の満鉄公所所長の早川正雄が「当時張作霖が北京を引揚げるとか、北軍の敗残兵が、圏外に雪崩れ出て来て、各地で略奪が始まらうとか、色々の噂があつて、各地に留邦人が、皆緊張して居る際であるから、多分予定を変更して、齊々哈爾迄は見えないであらう」と考えていたところに、夫妻はやってきた。早川は「（呉）夫人と与謝野晶子夫人との廻り逢ひは一種の劇的のものがあつた」と書く³¹。夫妻は、呉夫人と黒竜江省の警務所所長劉得権の夫人を紹介され、嫩江にある劉夫人の水荘に招待され、一団の兵士たちから「捧統の礼」を受けるといふ思わぬ歓迎を受け、「夢の境³²」にあるような時間を過すことになる。

落日の余光の中に三日月が不思議にも翡翠の色をして光を加へ、北へ渡る雁が幾つか鳴いて過ぎた。一つの舫には男ばかりが乗つて劉氏が櫓を取られ、私達婦人ばかりの舫は呉夫人が櫓を取られた。風は無く、空は晴れて、蒙古の沙の世界の事とは全く思はれない程、なごやかに美しい宵である。二

つの舫は明浄な水に泛んで静かに私達を河の中州に送つた。其処には一帯に楊柳の若木が茂つてゐる。(中略) 空は濃い瑠璃色に星屑の金を鏤め、五月の末にもう天の河がべつとりと乳を流してゐる。舫の上では、月と水明りとが呉劉夫人の水色のマントオを白く見せるのであつた。(嫩江の一夜)

その後、晶子たちは、昂昂溪駅から東支鉄道に乗り、一九二二年に晶子がシベリア鉄道經由でヨーロッパに向かつたのと逆向きのコースで哈爾濱に向かう。哈爾濱では古澤幸吉たちに迎えられた。晶子は、古澤幸吉夫人との交流から、呉夫人を思い出し、「此様な両国の婦人達が思想と趣味の上で交歓を重ねて行く機会が開けたら、日支双方の国民的理解の上にも有益な事であらう」(哈爾濱の五日)と考えたりした。

しかし、この数日後、張作霖爆殺事件が起き、同乗していた呉俊陞も死去することになる。晶子たちは、奉天駅の楼上にある大和ホテルで、爆発音を聞いている。

ホテルは深夜にも汽車の出入りする汽笛や響きのために殆ど眠られなかつた。翌朝私は早く起きて東京の子供に送る手紙を書いてゐると、へんな音が聞えた。顔を洗つてゐる良人も其れを聞いた。(中略) 一時間の後に別室に泊つてゐられた森(立名)さんと加藤(郁哉)さんが意外な変事を告げられた。満鉄京奉兩線の交叉するガードの下で、京奉線の汽

車が四台まで爆破され、張作霖と共に黒竜江省督軍の呉俊陞も^(たふ)殞れ、他にも支那官人と婦人との死者が多い様子だと云ひ、また爆破と同時にガードの上の満鉄線を守備してゐた日本兵と京奉線の番をしてゐた支那兵との間に銃火が交換されたと云ふのである。私達は初めて今先のへんな爆音の正体を知つたと共に、厭な或る直覚が私達の心を曇らせたので思はず共に眉を顰めた。さうして斉齊哈爾で一週間前に逢つた呉夫人がどんなに慟哭せられることであらうと想つて心が傷んだ。(奉天に著く)

晶子は、遼陽の阿片吸飲所を訪問した折の感想として、アヘンの吸飲を公認して奉天政府の収入を計っている事、アヘンの栽培を東三省の農民に強制し重税を搾取している事などを指摘して、張作霖を厳しく批評していたが、その盟友である呉俊陞を失つた呉夫人に対しては強い同情の念を示している。なお、事件の犯人について、香内信子は、『滿蒙遊記』に朝日新聞の奉天支局長である大井二郎と面会した晶子が「大井さんが事変に就て聞かせて下さつた所は、昨日から私達の直感してゐた所と大差が無かつた」と書きとめてゐるところから、「具体的には書かれていないがのちにわかる「関東軍の謀略」を感じとつていたのではないかと推定される」と指摘している。⁽³³⁾だが、後に晶子は「今度の出来事がいはゆる支那浪人たちのしたことやうに支那人たちの解きたい謎をかけられてゐることを近く聞くたびに、あの美しい人

を日本人の手で不幸にしたのならとそれだけのためにも頬の赤くなるやうな思ひがいたしました」と発言しており、どこまで真相を知り得ていたかはわからない。ただし、それが日本人の手によるものであるとの認識があつたことは、『滿蒙遊記』に収録された「若くして異国を恐れ遠く来て今日この頃は故国を恐れる」という寛の歌からも推察される。

以上のように、晶子と寛は、この滿蒙旅行において、滿洲の自然と人事に親しむことができた一方、はからずも日本と中国の関係の転換点に立ち会うことになつたのである。

四

さて、早川の言う吳夫人との「劇的な出会い」は、晶子たちの滿洲觀及び中国觀に大きな影響を及ぼし、『滿蒙遊記』にも投影されている。それは、たとえば、寛の書いた「滿蒙遊記の初めに」に書かれた次の一節に示されている。

個人と個人、民族と民族の心からの親善融和は、唯物主義と強権主義の外の問題である。それは相互の抽象的議論によることでもない。何よりも愛と趣味に和らげられた気分感情の交響に由つて培養し実現せらるべき問題である。

日本人は隣国の気分感情を読まねばならない。隣国の自然と社会生活、それから發して醗酵された隣国の気分感情を觀

察せず、味解せずして、支那及び滿蒙と自国との交渉を円滑にすることは不可能である。

また、五月二九日、哈爾賓總領事の招待を受けて、古澤幸吉とともに、午餐したときの感想を晶子は次のように書いている。

近年支那の排外思想が最も抵抗力のない、最も世界の耳目を惹かない此地で、日露両国は勿論、列国の既得権と未来の經濟的進出とを蹂躪してゐる時に、この食卓にゐられる人達の裏面の苦心と画策とを想像しながら、私は窃に邦人の滿蒙經濟が露支両国の幸福と矛盾する所のない解決を如何にしたら得られるかの問題に思ひ惑ふのであつた。南方ばかりでなく、此の北辺の地にまで、青年支那人の教育ある者が自主權の回復に目覚めてゐる。帝國主義的な見方からは怖ろしい事ながら、人道上からは支那人のために慶賀せねばならない。支那軍閥の小さな驕兒である行政長官張煥相の如きをして、その不法な排外行為を敢てせしめるのは、その背景を為す支那復興の機運である事を想はずにはゐられない。私は此席にゐられる武官達が時代の大勢を觀て善処して頂きたいと思ふのであつた。(哈爾賓の五日)

「排外思想」に対しても一定の理解を示しつつ、「邦人の滿蒙經濟が露支両国の幸福と矛盾する所のない解決」を祈念した文章で

ある。また、晶子は、「私は日本人としての立場から日支問題を考へると共に、隣人たる支那人の立場からも、また世界人としての私の立場からも考へて見て、響聲し、戦慄する事実の目前に迫つてゐるのに無関心であられなかつた。さうして日本を世界から孤立させる結果になりはしないかと想像して、心を暗くしてゐた」(奉天駅的印象)とも書いており、日中の良好な関係を願う姿勢がうかがえる。

山本藤枝は前掲の寛の文章について、「この時期の政府の一部や軍部(主として関東軍)にとつて、寛のいう「愛と趣味に和らげられたる気分感情の交響」など、文人のたわごとすぎなかつた」と言っているが、二人の考えは、当時の幣原外交の満蒙政策に照らすならば、必ずしも実現不可能な「理想主義」ではなかつただろう。

しかし、こうした願いを實現する上での障害が、一九二〇年代に展開されてきた中国の国権回復運動などのナショナルリズムと、幣原外交からの転換を計った田中義一内閣の「失敗」であり、日本と中国は、済南事件を経て、より対立を深めていった。

また、過剰な人口を抱えた日本という認識のもと、その解決を満洲への移民に求めるという晶子たちの考え方にも問題があった。たとえば、寛は次のように書いている。

予等は殖民地の邦人氣質が概して下級労働を嫌忌し、懶惰、尊大、贅沢、虚栄の中に不当の利潤を求めて其日を送る

風のあるのを否み難い。之がために邦人の窮民と下級労働者とを大連に見ないのは表面から見て結構な事のやうであるが、実は在留邦人の収入の多くを日常生活の消費に於て支那人に吸収されてゐるのである。満蒙の開拓が、いつまでも日本は、一部の資本家と其れに属する会社の従業員との外、すべて賃金の低廉な支那労働者を使役する在来の方法に終始すべきであるなら云ふ事はないが、この広大な地域に日本人口の調節を計る意味をも考慮するなら、勤勞を厭はぬ農民と商人とを合せて三四百万人も、近き将来に移植するやうな国策が樹てられなくてはなるまい。それにはまだ贅沢病に染まないう勤勉忍苦の日本人が、半年も冬籠する内地の東北農民の間に有り余つてゐると考へる。(大連雜記)

ここでは、近い将来に日本の人口の調整を計る場所としての満蒙の役割を期待し、一方で期待に反し、「下級労働を嫌忌」し、収入の多くを中国人に吸収されているとして、満洲在留の日本人の在り方が問い直されている。

晶子も、『満蒙遊記』未収録の「満蒙への移住」(『横浜貿易新報』一九二八・一二・二四)で「あんなに天恵に富んだ広漠とした土地があるのを、人口の過程と労働領域の過少とに悩んでゐる日本人が、なぜ今の内に競うて利用しないか」と書き、旅順の戦跡を訪れた感想として、「死者の最期の慰めは、自分達の兄弟がせせこましい本土を離れて、自由快活な労働生活を此の新しい領

土の中に開いてくれるであらうと云ふ希望では無かつたか」と書き、「滿蒙への移住」を提案している。晶子は、すでに一九二六年の時点で「今の日本にいろいろの煩い問題の起るのは八分まで経済的の生活苦からであり、生活苦がどの階級にも浸染する主要な原因は人口の過多である」（『生活苦の緩和』「横浜貿易新報」一九二六・九・一二）と書いて、人口問題への関心を見せており、この旅行で滿洲の広大な土地を目にしたことは、その人口問題解決の糸口を発見したような思いだったのではないか。

そして、『滿蒙遊記』では、そのような視点から在滿日本人の現状に対する苦言も書かれている。たとえば、「支那人のやうな忍苦の力と勤儉質素の心が無く、「團結力に乏しくて、海外に行つてまで同僚が排擠し、孤立的に利益を獲ようとする」ことが、「滿蒙の各地に於て日本商品の支那人と競争し得ない」理由だと指摘している（洮南）。また、長春の女学校を訪問したとき、女学生たちが、「支那語」を勉強しないことを残念がり、奉天の百貨店では、「支那店員の接客術の上手な事」、「日本語の流暢な店員があるのにも感心」する一方で、「在留邦人の商店で、各地とも此の程度に正しく鄭重な支那語の出来る店員は稀である」ことを指摘し、「出先で支那人と支那語とを軽視する風を改めなければ、日支の親善も日貨の普及も心細く思はれる」と評している（奉天の五日）。このように、『滿蒙遊記』は、滿洲の日本人が抱えている問題点や、実際に（移植）を行つた場合に予想されるだろう困難も書きとめられていた。

しかし、この年三月に発行された滿鉄庶務部調査課の『我國の人口問題と滿蒙』は、「滿洲はその土民の生活程度低く勞力の供給も相当豊富なるため勞銀極めて低廉であるから主として勞力によつて活動せんとするもの、滿洲移住は農業たると商工業たると其の職業の如何を問はず全く不可能である」、「滿蒙は我人口問題の直接解決の対象地としての価値ないものと見ねばならぬ」と結論づけている^④。また、同年九月の田中義一内閣の人口食糧調査会の答申も、滿蒙などへ「直接内地人口増加ノ緩和ヲ計ル」ことはできないとして^⑤いる。先の寛の提案に西田猪之輔は「纔かに微笑して「それは大問題ですなあ」と云」つたきりであり（大連雜記）、晶子も「彼地に在留する邦人に此事を話すと、商租権が得られない限り、そのやうな事は空想であると一笑に附した」と書きとめている（前掲「滿蒙への移住」）。

このような状況にもかかわらず、晶子は、それは「冒險心を失つてゐる人達の言草」（前掲「滿蒙への移住」）と批判し、その後も滿洲への人口移植という考え方に傾斜していった。それは関東軍の一部の軍人が滿蒙武力分離とともに、滿蒙領有と大量移民によつて日本の過剩人口は解決しようと考えていたのと軌を一にする^⑥。「文人のたわごと」（山本藤枝）とは、むしろこの滿洲への移民政策に向けられる言葉だっただろう。しかし、それは一九三〇年代には「国策」となつていった。晶子が滿洲への人口移植という考え方に囚われていったのは、一九二〇年代の不況から一九二七年恐慌、世界恐慌という状況のなかで打開策を見出し得なかつ

たことと、先に述べたように、この旅行で、広大な土地を見聞し、満鉄の「活躍」を目の当たりにしたことが大きかったのではないか。

五

その後の晶子は、「平生隣邦の人間の生存に對する國民の愛の不足が、特に田中氏等の帝國主義的妄動を透して彼國の人心に反映したのではないか」(「愛と人間性」『横浜貿易新報』一九二九・三・三)という田中義一内閣の批判から、「支那が國權の回復を望むことに十二分の同情を寄せてゐた私も、今度の東支鐵道の不法きはまる奪還行為には愛想をつかした」(「時事雜感」『横浜貿易新報』一九二九・七・二一)と批判の矛先を中国に向ける。滿洲事變に對しては、「日本はその排日行為に對して久しく隱忍を重ねた」、蔣介石も張學良も快速に善後策を講じないと云ふなら、東四省の支那國民自身が獨立して初めて國民の實力に本づく平和な新政府を建設し、日本と交渉して眞実に鞏固な共存共栄の道を開くのがよいではないか」(「最近の感想」『横浜貿易新報』一九三一・九・二七)と書き、評論集『優勝者となれ』(天來書房、一九三二・一〇)収録の際に「此の一文は偶然にも予言の如くになつて、間も無く滿洲國が成立したのであつた」と書いて、滿洲事變も滿洲國の建国をも肯定していった。

「時局を觀る」(『横浜貿易新報』一九三一・一〇・二一)の次

の一節は、「君死にたまふこと勿れ」(『明星』一九〇四・九)をうたい、大正デモクラシー期に平和主義を掲げたこともあつた晶子の(「転回」)がどのような合理化によつてなされてゐるのかを端的に示している。

日本國民が好戰國民でも無く、軍國主義的侵略思想の國民でも無く、唯だ日露戰爭の大きな犠牲に由つて獲得した正当な權利の範圍に於て、領土の狭い割に人口の過多に悩む國民の自存に必要な經濟的進出を隣邦の滿洲に求め、その曠漠未開の土地の利源を開発して、日支滿蒙諸國民の共栄を企図する外に、全く他意の無い人道的平和主義の國民である事を世界に知らしめたのは、数次の内閣に於ける幣原内閣の努力のためである。

秦郁彦は、日本人の滿洲に對する觀念と腹案を次のように整理している。すなわち、①幣原外交に代表される「權益維持方針」②田中義一内閣に代表される「特殊權益の擴張」③滿洲青年連盟のスローガンとなつた滿洲自治國の建設に代表される「自治政權の育成」。これは石原莞爾の考え方と合流して滿洲國建国のイデオロギーとなつた。④中国との平和的取引や買収取りなどによる「平和的領有論」⑤石原ら関東軍によつて發動された「武力領有論」⑥滿洲國となつて「實現」された「獨立國家論」⑦日本が拒否して國際連盟から脱退する事になつた「國際管理化」である。

この分類に、晶子たちの考えを位置づけるならば、情情的には①に近かったものが、③と接点を持ちつつ、その後、⑤と⑥に賛同していったといえるだろう。⁽⁶⁾

しかし、その後、二・二六事件が起こり、日中戦争がはじまるが、晶子は一九三〇年代半ば以降、時論的な文章をほとんど書かなくなった。一九四〇年に西田猪之輔が亡くなったときの文章で、晶子は「私には満洲の土を踏むに忍び切れぬ思ひがある。そればかりでなく今曾ての南満の旅の日を思ひ回らすさへ真に苦しい極みなのである」(『西田氏逝く』『冬柏』一九四〇・一)と書いているが、その心底にあるのは、亡くなった寛を思い出す事のつらさだけだっただろうか。

六

全体的に「上すべりの感」(山本藤枝⁽⁷⁾)がある『満蒙遊記』の晶子の歌の中にも、印象的な歌がある。

ハル濱^{はるびん}は帝政の世の夢のごと白き花のみ咲く五月かな 晶子

ハル濱は、ロシアが一九〇〇年頃、東清鉄道の根拠地として建設した街である。「帝政」はロシアが支配していた頃のことを指し、それは夢のようだとうたう。残ったのは、自然の中に咲く白き花ばかりであって、季節は人事に関係なく推移していくのであ

る。この歌は、晶子の意図を越え、「満洲帝国」の未来をも暗示するかのようだ。

呉夫人の生死^{しやうじ}を知らず初めより夢の花ぞと思ひけらしな

晶子

「満蒙の歌」の最後に置かれた歌で、初出は、『婦人之友』サロン——支那の旅⁽⁸⁾である。ここで晶子は、呉俊陞の死の際に、呉夫人が「毒を仰いで死を選ばれたといふ報せ」を聞いて驚いたこと、帰路の大連で「毒をのまれたが死にはなさらなかった、けれど後は食を絶つてしまはれたというやうな噂」を聞いたことを明かしている。呉夫人の歓待は、夢の中の出来事のようにであり、呉夫人は夢の花のような存在であった。その呉夫人は日支の関係を結ぶような存在でもあったが、その呉夫人はいま生きているかどうかともわからない。彼女は最初から夢の花だったらしい。この歌は、日支関係の結びつきと思つていたものもはたして幻に過ぎなかつただろうか、という意味を暗示する。この歌を晶子はあえて最後に配置したのではなかつたか。

『満蒙遊記』は、満鉄の招待により実現した寛・晶子の旅行記であるが、その刊行にいたるまでには、満鉄の周到な広報活動が働いており、当時の満鉄や満洲での日本人の活動に資する面もあった。一方、満鉄関係者の認識とは異なり、人口過剰に悩む日本という認識のもと、満洲への移住を訴えるなどの主張がみられ、

そこには、当時の満洲で中国人との競争に勝てない日本人のありさまの観察があり、日本の満洲支配の困難さを浮き彫りにしている。しかし、その後の晶子は満洲事変における日本軍の行動や満洲国の建国を承認し、「夢」をみていった。寛と晶子の残した数首の短歌は、それが「見果てぬ夢」であることをはからずも表現していたのである。

注

(1) 大阪屋号書店から一九三〇年五月一七日に刊行された。全三四四頁で、薄いアート紙二四枚に写真(四八葉)が載った頁が収められている。構成は以下の通り。

満蒙遊記の初めに(寛)／出発と船中(寛)／大連雑記(寛)／金州以北の記(晶子)／満蒙の歌 其一(寛)／満蒙の歌 其二(晶子)／満蒙遊草(漢詩、寛)

もつとも頁を割いているのが、晶子執筆の「金州以北の記」で、四二頁から二一〇頁に及ぶ。その大半は『横浜貿易新報』一九二八年六月一七日から二月一六日まで二七回にかけて掲載された「満蒙の旅」(一)〜(二十七)が初出である。連載第一回の前半部分、大連について書かれた部分が削除され、代わりに寛の「大連雑記」が収録されている。また、「満蒙の旅」に掲載されていた歌は、『満蒙遊記』では「満蒙の歌」の章に推敲の上、収録されている。

『満蒙の歌 其二』(寛の短歌、全三三九首)は、雑誌『満

与謝野寛・晶子『満蒙遊記』をめぐる

蒙』(三二首)をはじめ、『横浜貿易新報』、『国民新聞』、『満洲日報』等に発表されたものを収めている。「満蒙の歌 其二」(晶子の短歌、全三二四首)は、『改造』、『横浜貿易新報』、『文芸春秋』、『国民新聞』、『満蒙』、『大連新聞』、『満洲日報』、『くさねむ』等に発表されたものを収めている。寛の漢詩「満蒙遊艸」の初出の大半は『満蒙』(一九二八・七〜一二)である。『鉄幹晶子全集』第二六卷(勉誠出版、二〇〇八・一二)の「解題」(川崎キヌ子)参照。

(2) 『満蒙遊記』に関する研究の代表的なものとして、香内信子「満蒙旅行——晶子における転回の契機」(『社会文学』一九九三・七、『与謝野晶子——昭和期を中心に——』ドメス出版、一九九三・一〇)に収録、川崎キヌ子『満洲の歌と風土 与謝野寛・晶子合著『満蒙遊記』を訪ねて』(おうふう、二〇〇六・三)、永岡健右「時代の証言：寛・晶子が『満蒙遊記』で見たもの」(『国文学 解釈と教材の研究』(二〇〇七・六臨時増刊)、太田登「アジア体験の意味——晶子における一九二八年——」(『与謝野寛晶子論考——寛の才気・晶子の天分——』八木書店、二〇一三・五)、香内信子「与謝野晶子の『満蒙遊記』(植民地文化学会編『近代日本と『満洲国』』不二出版、二〇一四・七)がある。

(3) 宇佐美完爾は、一八八四(明治一七)年生まれで、東京帝国大学法科大学政治学科卒。鉄道院参事、中島鉱業株式

会社、佐賀炭硫長営業部長を経て、一九二〇年に運輸部営業課長として満鉄に入社し、一九二七年四月より鉄道部長。満洲事変時には、満鉄ハルビン事務所長と奉天事務所長を兼任。後に東北交通委員会最高顧問を兼務した。一九三四年七月には、満鉄理事、鉄路総局長と鉄道部長を兼任、三六年一〇月鉄道総局次長。『満蒙日本人紳士録』(満洲日報社、一九二九・五)、『満洲紳士録 第三版』(満蒙資料教会、一九三七・七)、竹中憲一『人名事典「満洲」に渡った二万人』(皓星社、二〇二二・一〇) 参照。

(4) 西田猪之輔については、西創生編『満洲芸術壇の人々』(曠陽社出版部、一九二九・九)、注(3)、『満蒙日本人紳士録』、注(3) 竹中憲一『人名事典「満洲」に渡った一万人』参照。渡邊巖については、『満洲芸術壇の人々』参照。また、香内信子「満州短歌会」(台萌くさむね)と晶子」(与謝野晶子——さまざまな道程』一穂社、二〇〇五・八) 参照。

(5) 古澤幸吉(一八七二—一九五一)は、東京外国語学校(ロシア語)の第一期生として一九〇〇年卒業。外務省嘱託、ハルビン総領事館、ロシア大使館の勤務等を経て、一九二〇年、満鉄入社、ハルビン公所長(二三年ハルビン事務所に拡充)となり、ハルビン日本人会会長も務めた。二九年退職するも三五年三度ハルビンへ赴いた。ハルビンの日本人社会を代表する存在となる。自伝に、幸吉の孫たち

が編纂した『古澤幸吉自叙伝「吾家の記録」——村上・厚岸・東京・ハルビン』(私家版、二〇一六・五・二五)がある。

なお、堺市博物館『与謝野晶子生誕140年記念企画展パンフレット 与謝野晶子の満蒙旅行』初公開書簡を中心に(二〇一九・二) 参照。

(6) 古澤家所蔵、大正十五(一九二六)年七月七日付古澤幸吉・しづ子宛与謝野晶子書簡。しづ子は、幸吉の妻。

(7) 一九二二(明治四五)年に設立されたジャパン・ツーリスト・ビューローの後身である東亜旅行社による『東亜旅行社満洲支部十五年誌』(一九四三・一二)の第二章「事業の概要」の第三項「宣伝」に「文士画家招聘」の項目があり、次のように記載されている。

日本内地に対する満洲紹介は、満鉄其の他によつても行はれ来つたが、ビューローに於ては昭和三年大々的に計画、実行された。即ち文士、画家招聘がこれである。

日本の著名文士、画家を満洲に招聘してこの人達の満洲旅行によつて収穫された絵と文とを取纏め満洲案内記を編纂して満洲を汎く紹介すべく計画された。之により昭和三年には田山花袋、与謝野鉄寛夫妻、有島生馬、正宗得三郎、鳥居龍蔵の諸氏、昭和四年には高浜虚子、田辺至、中澤弘光、志賀直哉、里見弴の諸

氏、昭和五年には佐藤惣之助、小杉未醒、久米正雄、大佛次郎、福田平八郎諸氏の来満を乞ひ新聞雑誌にそれ等の人の作品が発表された。

「鉄寛」の表記をはじめ、大正十二年渡満の田山花袋、昭和二年の有島生馬、正宗得三郎の渡満を昭和三年にするなど、誤りの多い記述であるが、ジャパン・ツーリスト・ビュローも夫妻の招待にかかわっていると思われる。そもそも宇佐美完爾自身、満鉄の鉄道部長とジャパン・ツーリスト・ビュロー満洲支部長（在任期間は一九二六・六一九三〇・七）の兼任だった。

(8) 昭和二（一九二七）年二月一三日付古澤しづ子宛晶子書簡には、「先頃ハ有島、正宗両氏が御地へ参られ御優待を受けられ候こと、いろいろと御話を承り申し候。また私どもへの御伝言も承り申候。両氏も大喜びをなされをり候。実ハ両氏の御話を承りて私ども夫婦も一度満洲の風景二接したしと申し候までに、御地方がなつかしく候。併し北京までへも参る事になれば一ヶ月を要し候べく、実行ハむつかしく候」とあり、古澤側から正宗得三郎と有島生馬に伝言を託し、夫妻への満蒙旅行を勧めたことがわかる。

その後、昭和三年一月三十日付古澤幸吉宛書簡では、「満鉄より御招待被下候やうにして二家へ被下候だけの旅費（老人貳千圓と承り候）を前二御遣し被下候やうの御取払を願はれまじく候や。あなた様の思召二先づ従ひ申度候

につき、こゝに折入つて御相談申上候」とあり、改めて、招待を受け入れている。そして、古澤幸吉宛昭和三年二月十四日付書簡では、「親戚の有島生馬氏昨夕欧洲へ参られ候が、その前二満洲旅行の事を相談致候処、同氏より宇佐美様へもお通じおき被下候由二候。右御含み被下度候」とあり、宇佐美完爾への紹介を依頼しているのである。

なお、注(5)の古澤の自叙伝に「自分が宇佐美鉄道部長と相談して与謝野夫妻を満洲へ招待した」と書かれ、『満蒙遊記』に「私達が此の満蒙旅行を為し得たのは、主として先生と大連の満鉄本社の宇佐美寛爾さんとの御厚意に由る事」と書かれていたことが、右の書簡で裏付けられたといえる。

(9) 西創生編『満洲芸術壇の人々』（曠陽社出版部、一九二九・九）、高媛「一九二〇年代における満鉄の観光宣伝——囑託画家・眞山孝治の活動を中心に——」（『Journal of Global Media Studies』一七・一八合併号、二〇一六・三）参照。

(10) 注(9)高媛論文。眞山が同行した主な文化人として、奥野他見男、田山花袋、鳥居龍蔵、有島生馬、正宗得三郎、与謝野寛、晶子、中澤弘光、田邊至、里見暉、志賀直哉を挙げている。

(11) 注(3)『満蒙日本人紳士録』、注(3)竹中憲一『人名事典「満州」に渡った一万人』、注(4)『満洲芸術壇の

人々」参照。

(12) 注(3) 竹中憲一『人名事典「満州」に渡った二万人、

注(4) 『満洲芸術壇の人々』、参照。

(13) 太田登「小日山直登資料にみる与謝野晶子」(一)～(六)

(与謝野晶子倶楽部)一九九八・三、一〇、一九九九・三、一一、二〇〇〇・一一、二〇〇二・四)、堺市博物館『与謝野晶子生誕140年記念 利晶に探る 与謝野晶子コレクション』(二〇一八・一一) 参照。

(14) 満青聯史刊行会編『満洲青年聯盟史』(一九三三・八、明治百年史叢書を参照) 一一～三二頁。

(15) 財団法人満鉄会『満鉄四十年史』(吉川弘文館、二〇〇七・一一) 二二七～二二八頁。加藤聖文『満鉄全史 「国策会社」の全貌』(講談社、二〇〇六・一一) 一三一～一三三頁。

(16) 注(14) 『満洲青年聯盟史』三五～三六頁。

(17) 太田登は、「小日山直登との出会いは、その後の晶子の満洲問題ひいては中国観を決定したのではないかと推測される」(注(2) 『与謝野寛晶子論考』一九八頁)と指摘し、その理由として、小日山の『日滿統制経済論』(創建社、一九三二・一〇)を紹介しながら、「たとえば晶子が熱心に提言する日本農民の満洲への移植も、小日山の『満洲国の移民問題』の議論に導かれたものであろう」としている。しかし、人口問題の懸念については、晶子はすでに一

九二〇年代から発言しているほか(「就職難」『横浜貿易新報』一九二六・一〇・一〇)、小日山の『日滿統制経済論』では、「人口問題解決策としては、少くとも満蒙移民に就ては、多くの期待を懸け得ないのである」と述べている(二三九頁)など、後述する晶子の提言との相違もみせている。

(18) 高媛「招待旅行にみる満洲イメージ」(旅の文化研究所編『満蒙開拓青少年義勇軍の旅路』森話社、二〇一六・四)。
なお、満鉄で弘報や情報の仕事に従事していた磯村幸男は、「総裁で情報に本当に関心を持っていたのは、私の知る限りでは、松岡総裁と小日山直登総裁だったと思います。重役では宇佐美寛爾さんが一番熱心でした。宇佐美さんはどんな情報でも黙って読んで、それをよく利用していました」と証言している(『満鉄の情報・弘報活動』『アジア経済』一九八八・四)。また、松本豊三「満鉄と弘報業務」(『宣撫月報』第三卷第十号)参照。

(19) なお、吉田初三郎が、満鉄の鉄道部の依頼で、大連をはじめ、関東州と満洲の鳥瞰図を描いたのも、一九二〇年代後半のことである。『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』(平凡社、二〇〇二・一〇) 参照。

(20) なお、昭和十年版(一九三五・四)には編集人として加藤郁哉の署名がある。また、発行人は、宇佐美寛爾の三男で、満鉄鉄道総旅客課長、満鉄観光連盟の初代理事長を務

めた宇佐美喬爾となっている。

(21) 注(18)、高媛「招待旅行にみる満洲イメージ」。

(22) 大阪屋号書店については、戸塚誠「幻の『大阪屋号書店』

のこと」(『文献継承』第一八号、二〇一・四)、神山山

陽『桂馬の高跳び 坊つちゃん講釈師一代記』(光文社、

一九八六・二) 参照。

(23) (24) 注(18) に同じ。

(25) 川村湊(案内人)『満洲鉄道まぼろし旅行』(ネスコ、一

九九八・九) は、「満洲国」成立後の一九三七年の架空満

洲旅行の行程として、大連・旅順・熊岳城・湯崗子温泉・

鞍山・遼陽・奉天・五龍背温泉・撫順・新京(長春)・吉

林・哈爾濱・齊齊哈爾・満洲里を想定している。ただし、

「齊齊哈爾」については、「齊齊哈爾まで来るとはすこ

い」、「大部分の旅行者は、日程を哈爾濱で打ち切ってしま

うからね」とされ、「満洲里」から飛行機で日本に帰国し

たという設定になっている。「千山」は、「どんなに急いで

も、三日はかかりますよ」と言われて、紹介にとどめてい

る。

(26) 山本藤枝『黄金の釘を打った人 歌人・与謝野晶子の生

涯』(講談社、一九八五・九) 六八九頁。

(27) 小野寺史郎『中国ナショナリズム 民族と愛国の近現代

史』(中央公論新社、二〇一七・六) は、済南事件が当時の

の中国世論に及ぼした影響として、「中国ナショナリズム

の主要敵が、五・三〇運動以来のイギリスから日本に変わ

ったこと」「蒋介石や中国社会の対日感情を決定的に悪化

させたこと」を挙げ、「二十一カ条要求に続く、日中関係

の第二のターニングポイントとな」ったとまとめている。

一一二～一二三頁。

(28) 中山隆志『関東軍』(講談社、二〇〇〇・三) 六七～七〇

頁。

(29) 注(26) に同じ。

(30) 注(18) に同じ。

(31) 早川正雄『呉俊陞の面影』(大阪屋号書店、一九三〇・

二) 一一五～一二六頁。

(32) 「婦人之友」サロニー支那の旅』(『婦人之友』一九二八

・八)

(33) 注(2) 香内信子「与謝野晶子の『満蒙遊記』」。なお、

翌日、晶子たちは林総領事に会っているが、「張作霖の死

については明言を避けられた」と書いている。実際には、

事件当日、林は、奉天に滞在していた民政党の代議士たち

に「陸軍の連中がやったんだ」と発言している(秦郁彦

「張作霖爆殺事件の再検討」(『旧日本陸海軍の生態学』中

央公論新社、二〇一四・一〇、二四三頁)。

(34) 注(31) に同じ。

(35) 「私は支那の文学者と文学書生とに数人の友人を持つてゐ

る」(『寒夜雜稿(五)』『横浜貿易新報』一九二九・一) と

書いている通り、晶子には、『与謝野晶子文集』を翻訳した張嫻女史をはじめ、中国人との交流があり、そのことが「日支親善」の考え方を支えていた。

(36) 注(26)、山本藤枝『黄金の釘を打った人』六八八頁。

(37) 幣原外交における滿蒙政策については、西田敏宏「第一次幣原外交における滿蒙政策の展開 1926-1927年を中心として」(『日本史研究』二〇〇五・六)参照。西田は、幣原外交の滿蒙政策が、張作霖支持政策を転換したのち、滿州新政権と国民政府の妥協を日本が積極的に働きかけ、「国民政府の滿洲進出は阻止する一方で、国民政府の宿望である中国統一の実現に協力的態度を示すことにより、日本と国民政府の関係を良好に保ち、經濟面を中心に日中関係を将来さらに發展させていくことを意図したものだ」としている。なお、滿洲新政権の担い手として挙げられている東三省の有力者に呉俊陞の名前も挙がっている。注(31)で早川正雄も、呉俊陞を「日支親善の第一人者」と呼んでいた。

(38) ただし、小山俊樹は、近年の研究を踏まえつつ、「田中の理想は、滿州を張作霖が、滿洲を除く関内を蒋介石が治めて、それぞれが日本の權益を尊重することにあつた」とし、山東出兵に関しても、「内戦への武力干渉を想定する陸軍を牽制して、現地での衝突を戒め、世論が求める居留民保護を出兵目的とするように動いた」と指摘している

(筒井清忠編『昭和史講義3 リーダーを通して見る戦争への道』筑摩書房、二〇一七・七)。

(39) 注(2)、香内信子「滿蒙旅行―晶子における転回の契機」参照。

(40) 在滿日本人社会の様相については、塚瀬進『滿洲と日本人』(吉川弘文館、二〇〇四・九)参照。

(41) 滿鉄庶務部調査課『我國の人口問題と滿蒙』(一九二八・三)二四六頁。

(42) 小林道彦「大陸政策と人口問題―一九一八―三二年」(伊藤之雄・川田稔編『環太平洋の國際秩序の模索と日本―第一次世界大戦後から五五年体制成立―』一九九九・一一、二一一頁)。

(43) 一九二七年六月一日付関東軍司令部「对滿蒙政策ニ関スル意見」には「我帝国ノ将来ヲ左右スル人口及資源問題ハ海外發展ニ由リ解決スルヲ以テ第一義ト為ササルヘカラス而シテ其ノ發展ノ重点ハ滿蒙及西伯利方面ニ撰定セララルヲ要ス蓋シ該方面特ニ滿蒙ハ我帝国多年ノ奮闘努力ニ由リ發展ノ基礎既ニ樹立セラレ且問題解決ノ要素ヲ具備スルヲ以テナリ」とある。佐藤元英『昭和初期対中国政策の研究』(原書房、一九九二・一二)九八―一三三頁、注(42)の小林論文(『環太平洋の國際秩序の模索と日本』二二五頁)。また、加藤聖文「滿洲移民計画の形成と『国策化』」(『歴史評論』二〇一〇・三)参照。

(44) 一九三〇年前後、晶子の「女子の経済的自立」という考
え方が後退していったことについては、拙稿「与謝野晶子
の『結婚』観―「女性の経済的自立」との関連で―」（『神
戸山手短期大学紀要』二〇〇九・一二）参照。また、晶子
自身を縛った「緊縮主義」の陥穽については、別稿を期し
たい。

(45) 秦郁彦「満蒙領有の思想的源流」（注（34）『旧日本陸海
軍の生誕学』一九五〇―一九八頁）。

(46) 注（2）、太田登「アジア体験の意味」、香内信子『与謝
野晶子―昭和期を中心に―』参照。

(47) 注（26）に同じ。

(48) 注（32）に同じ。

※与謝野晶子・寛の著作は、『鉄幹晶子全集』（勉誠出版、二〇
〇一）刊行中）、および『与謝野晶子評論著作集』（龍溪書
舎、二〇〇一―二〇〇三）を使用した。

※古澤幸吉関係の資料に関しては、古澤陽子氏と堺市博物館に
便宜をはかっていた。感謝申し上げます。

（たぐち・みちあき 本学教授）